

いくら滋養に富む食物でも、消化力の弱い赤ん坊にむやみに食べさせたのでは、害になるばかりで益するところはないであろう。如何に立派な古碑帖でも、それをよく咀嚼玩味（その意味や趣をよく考え理解）するだけの素養がなければ何にもならないのみか、却って進歩を妨げるような場合もないではない。ごく初歩の人に古碑帖の臨書をすすめるのは、生れたばかりの赤ん坊に固形物を食べさせるようなものであるから自分は採らない。

標題にある初学とは、筆の使い方から文字の書き方一通りは心得て、進んで古碑帖を学び得るだけの素養のある人を指すものであることを特にお断わりして置く。

人には好き嫌いがあって、嫌いなものを強いられるほど迷惑なことはない。故に絶対的な理由の存在せぬ限り、「一、二の碑帖を指して初学は是非これを学べ」などということを私はいたくない。

そこでまず楷書の古碑帖にはどんなものがあるか、その著名なものを挙げ、その内で相似たものはこれを一括して、それらが果して初学に適するかどうかを検討して見ようと思う。取捨（不要なものを捨て、必要なものを選び取る）は勿論（もちろん）人々の自由である。

鍾繇と王羲之

さて楷書は何時頃から出来たか、その年代は明かでないが、八分体の盛行時代たる漢代に、日常の用務を弁ずる（処理する）ために手数のかかる八分体を早書きしたために、筆画が簡略されて漸次楷書の一体をなしたものと考えられている。それは、秦代は申すまでもなく、漢代にあっても楷書の碑というものはないのであるが、近代出土の漢代遺墨中には楷書と目すべき（みなす）ものがちらほらと見える。これは金石に刻して千載（長い年月）に残すべき碑などは当時の正体たる八分体で書くけれども、日記をつけるとかあるいは手紙を書くとかいうような日常の用務を弁ずるためには楷書というべき書体が行われていたことを証（証明）するのであって、即ち楷書は少くとも漢末には既に出来ていたと考えてよいのである。

然しながら古碑帖に残る楷書としては、魏の鍾繇の書といわれるものがまず一番古いようである。鍾繇の書としては

宣示表

薦季直表

墓田丙舍帖

などが有名である。これらは皆細楷であって、用筆も結体も頗る（非常に）整っており、晋の王羲之の

樂毅論

黄庭經

孝女曹娥碑

または王献之の

洛神賦

などと頗る共通点が多い。もっとも鍾繇は楷書の名人で、王羲之などもその書をよく学んだということであるから、共通点のあるのに不思議はないのであるが、この時代にかくも整った楷書があったかどうかというところで、碑学家、即ち碑の方を主として学ぶ方の側からいうとこれが一つの疑問となっているようである。

然しながら漢代の隸書にしても曹全碑などのように頗る形の整ったものもあるのであるから、その点には別に不思議とするには当たらないと私は思う。ただ何れも細楷のことであるから、翻刻(書物を原本どおりの内容で製版・印刷する)を重ねている内にどういう風に変って来ているか、果してどの程度に原書の趣を伝えているかということは大いに疑問といわなければならぬ。

故にこれらを直ちに鍾繇や羲之として学ぶのは一種の危険をさえ伴うものといいたいが、そうした事に関係なしにこれらの書風を好んで学ぶというのなら、初学にでも敢て(決して)学び難い書ではない。尚我国には光明皇后の御書と伝えられる樂毅論の臨書があつて、時代も古く且つ実に見事な御筆蹟であるから、これを参考として、まず樂毅論を学ぶのが右の諸帖を学ぶ上の順序としては最もよいであろうと思う。

次にこれ等とほぼ時代を同じにするところの碑に

爨寶子碑

爨龍顔碑

の、所謂二爨と稱せられるもの、また

華嶽廟碑

中岳靈廟碑

などがある。これ等は何れも碑学の方で著名なもので、頗る面白いものではあるが、用筆は隸書に近く、形も亦奇なものが多くて初学に適するものとはいわれない。

龍門造像と鄭文公碑

次に龍門造像というものがある。これは佛像の背や台石などにそれを建立した事由を刻したものでその数は非常に多く、その内で佳なるものを選んで龍門二十品といい、更に四種を選んで龍門四品とも称している。龍門四品に選ばれたものは

始平公造像

孫秋生造像

楊大眼造像

魏靈藏造像

の四種で、これらは書としても立派なものであるけれども、刻刀の跡がまざまざと出ていて毛筆では真似の出来ないところがある。それを何の程度まで毛筆を以て臨すべきか、一寸むずかしい問題で、従つて初学にはこれは重荷であらう。

石門銘

は王遠の書で、魏の永平二年(皇紀一一六九年)のもの、規模雄大、自由奔放にして仙骨(非凡な風采)を帯びた面白いものであるが、筆意が不明瞭であるから、

瘞鶴銘

などと共に初学にはとりつけないものである。

鄭文公碑

を始め鄭道昭の諸碑をこの部類に入れるについては、あるいは異論があるであろう。それほど鄭道昭の書は整ったものではあるが、何れも天然の崖に刻された所謂(いわゆる)摩崖の碑であるから、永い間風雨の厄(災い)に遭い、細かい筆意などは窺うべくもない。故にこれも古碑帖臨書の第一歩としては無理である

と思う。

そこへ行くと、長く墓穴の中にあつて雨淋(雨に濡れ)日炙(陽にあぶられる)の厄を免かれていた多くの墓誌銘は、殆んど刻された当時と変らぬ姿で土中から発掘されるために、書と刻と二つながら(両方が)よいものならば初学の手本としても誠に好適である。

司馬景和妻墓誌

李超墓誌

張玄墓誌

蘇孝慈墓誌



など有名で、これらは、六朝書中最も整った楷書として有名な

張猛龍碑

高貞碑

などと共に初学の絶好伴侶であろう。

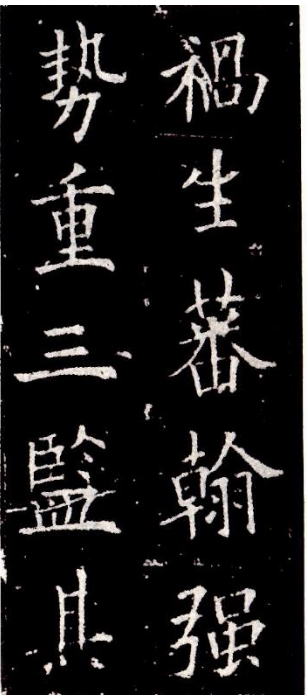
唐の四大家

次に唐の四大家は何れも楷書の名人で、虞世南には

孔子廟堂碑

があり、虞世南の碑書として唯一のものであるが、惜しいことには原石が火厄に遭つて早く亡び原拓を見ることが出来ない。極めて品格の高い書で、それだけ初学には一寸とりつきにくいところがある。欧陽詢には

皇甫府君碑



九成宮醴泉銘

化度寺碑

虞恭公碑

などがあり、用筆練勁(練れた力)、結法また端莊(きちんとして威厳があり)俊嚴(峻しく厳しい)にして犯すべからざる品位があつて、古来楷法の極則といわれている。皇甫府君碑と九成宮醴泉銘が字画完好で初

学に好適であろう。なお欧陽詢の楷書として、蘭亭帖、蘇玉華墓誌銘などが流布されて(広く伝わって)いるが自分は採らない。恐らく後人の偽作であろう。褚遂良のものでは

伊闕佛龕碑

孟法師碑



雁塔聖教序

房玄齡碑

等があり、雁塔聖教序は最も円熟せる代表的傑作で、且つ字画も完好であるが、変化に富んでいるため初歩の内は一寸習いにくいかと思われる。まず孟法師碑から入るのが順序であろう。顔真卿には

多寶塔碑

麻姑仙壇記

宋環碑

建中帖

その他頗る(非常に)多いが、中でも多寶塔碑は字画が完好でよく整っており、初学にも学び易いものである。しかし顔書の面白味は建中帖などにある。それだけむずかしいけれども、建中帖の真跡は今我国に渡って中村不折翁の所蔵に帰しているから、その写真等によって研究すれば筆意を知ることが出来よう。その他

王知敬の李靖碑

敬客の填塔銘

欧陽通の道因法師碑

なども斉整雅健(整い揃っていて魅力に溢れている)にして初学の(初学が)学んで誤りなきものと信ずる。

以上、初学に適せぬものをも挙げたのは、その適せぬ理(理由)を述べて碑帖選択の方針を定める上の参考にしたのである。書風に至っては右の内から各自好むところに随って取捨さるべきこと、頭初に於いて述べた通りである。